



十一面観音菩薩立像

光明皇后の手による十一面観音像をもとに、慶派の仏師が鎌倉時代に造立した。昭和28年まで秘仏だったため、良好な保存状態で今に伝わる。頭飾や装身具はすべて銅製鍍金。衣には朱や緑青などが彩色され、唐草など様々な文様が切金で表わされている。像高94㎝。国の重要文化財

「第80回」古都逍遙

仏に出会う旅

奈良

かいりゅうおう
海龍王寺
じゅういちめんかんおんぼさつりゅうざう
十一面観音菩薩立像

白洲 「花を生ける」というのは、そもそも神仏に花を捧げることから始まったそうですね。笹岡 鎮花祭に象徴されるように、古来、花には霊力があると考えられていました。神の宿る依代がいけばなの源流といわれています。さらに仏前の供花や鑑賞のための花が交じり合い、現在のいけばなが成立します。白洲 仏教で花といえは蓮を思い浮かべます。笹岡 泥水の中から咲かせる美しい花が仏の慈悲の象徴とされているように、蓮は仏教で最上位の花といえます。そういえば、この観音像も左

●インフォメーション
奈良県奈良市法華寺北町897
TEL / 0742-33-5765
《海龍王寺拝観(通常)》
拝観時間 / 9:00~16:30 拝観料 / 大人400円、中高生200円、小学生100円 拝観日 / 無休(ただし、8月12~17日、12月24~31日は仏事のため閉門)
《春季特別公開 十一面観音菩薩立像特別開催》
特別公開日 / 2013年3月23日~4月7日
拝観時間 / 9:00~17:00 拝観料 / 大人500円、中高生300円、小学生100円 備考 / 公開日は変更の場合もあり
《アクセス》
近鉄奈良駅からバスで「法華寺前」下車、徒歩約3分



海を渡る人々を魅了し、愛された観音像 日月和合の杜若の紫に思いを巡らす

手に蓮の花を挿した水瓶を持っていますね。白洲 十一面観音は水と関係の深い仏で、必ず左手に水瓶を持っています。このスタイルは平安時代に入ると大流行しました。十一のお顔を持つ仏であり、そのお姿は様々な形で人々を守り続けてくれるという仏の慈悲を表現しています。古来、八百万の神を信仰してきた日本人にとって、あらゆる願いを受け止めてくれる十一面観音は親しみやすい存在だったということでしょう。笹岡 なるほど、たしかに角度によっていろいろなお顔に見えます。微笑んで優しく見えたり、厳しく論じているかのようであったり。愛らしいといえますか、福々しいお顔をされていらっしやる。こうしてお顔を見てみると、吸い寄せられるようで目が離せなくなりませう。白洲 きつと見るものを惹きつける強い力をお持ちなのではないでしょうか。この観音様に捧げるとしたら、どんな花でしょうか。笹岡 杜若はどうでしょうか。未生流笹岡の流花であり、その紫は「日月和合」の色とされています。



◆ゲスト 笹岡隆甫

華道「未生流笹岡」家元。1974年京都府生まれ。3歳から祖父・二代家元笹岡勲甫の指導を受ける。97年京都大学工学部建築学科卒業。同大学院博士課程中退後、華道に専念。11年三代家元を継承。著書に「いけばな」など

◆案内人 白洲信哉 (写真左)

文筆家。細川護国元総理の公設秘書を経て、様々な日本文化のイベントをプロデュースする

◆写真 森川 昇 (平成24年12月撮影)



海龍王寺
元は飛鳥時代に毘沙門天を本尊として建てられた寺院。天平3(731)年に光明皇后が創建。中国に渡った初代住持・玄昉が嵐の中無事帰朝して以来、遣唐使の渡海安全祈願を営むことから、旅の安全を祈願する寺として知られる

ます。太陽と月が向き合う時に紫の雲がたなびくと古書の一説にもあります。ですから、杜若を生ける際は、その場を清浄にし、身を清めてからいけば、と教わります。それほど大事な花ということですね。白洲 お話を伺っているとさすが華道の家元でいらっしやると思えますが、ご出身の大学では建築を専門にされていたとか。いけばなと建築、ずい分と趣が違いますね(笑)。笹岡 よくいわれます(笑)。でも、建築といけばなは似ています。いけばなで用いる白銀比が建築や仏像にも現れるという説もあります。白洲 バランスといえは、じつはこの寺の本堂と小さな五重塔が入っているんです。古き良き奈良の雰囲気そのままだけです。古き笹岡 私は京都生まれの京都育ちですが、この辺りの佇まいは好きですね。同じ京都ですが、京都とは異なる独特の趣があります。白洲 この寺は遣唐使とのゆかりの深いので、大陸の文化が流れ込んだはずで。当時の奈良は驚くほどの国際都市だったのでしょうか。

